新彌寺物語

下

四

へ13
3323
4

門へ13
3323
巻4

新編奇怪雜談卷之四目錄

猪鼻山天狗

奇病

窟村死女

稲荷山化物

盲人傳化狐

狐付文吉淫目光

大正十年八月廿九日
本大學出版部

新編奇怪雜話巻之四

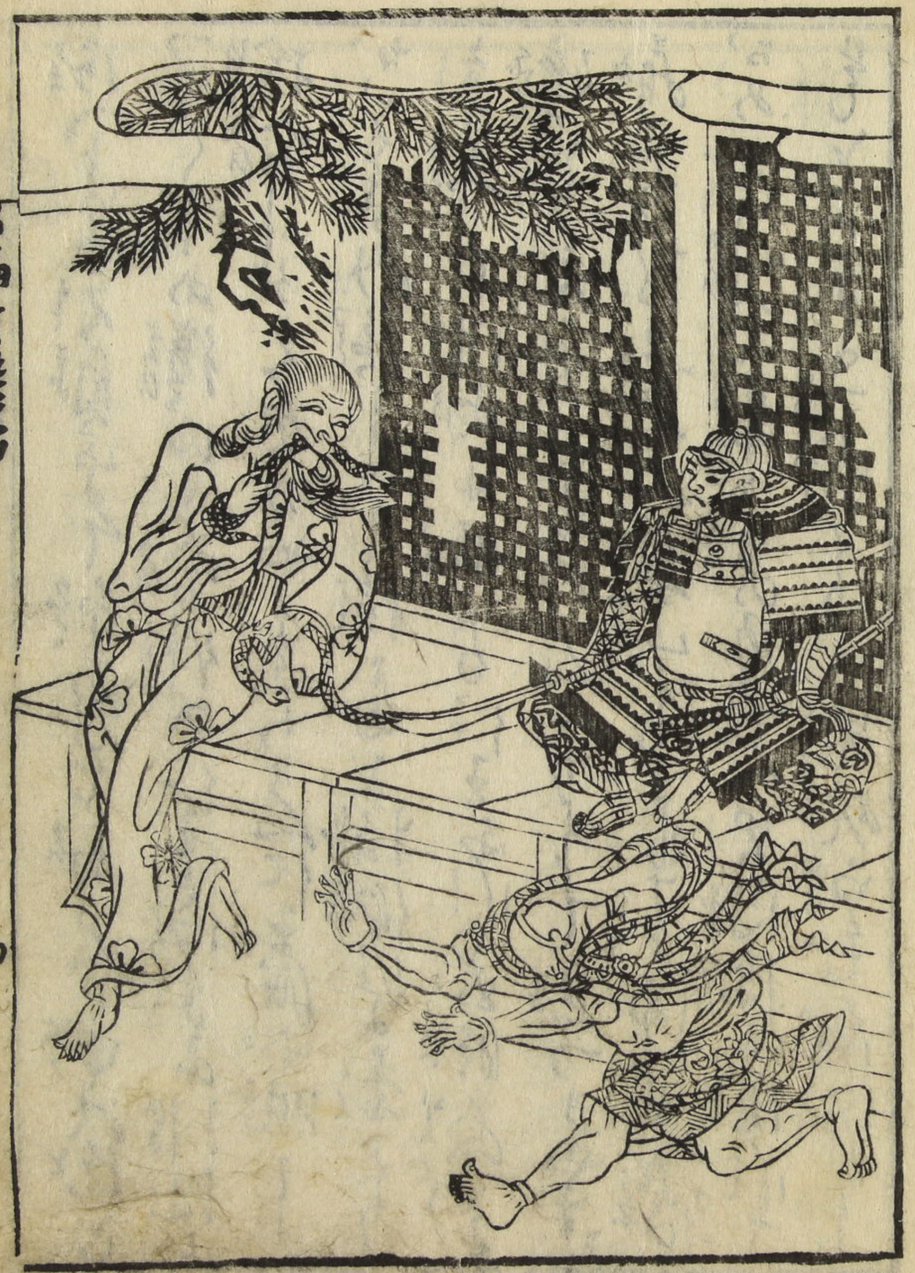
猪鼻山天狗

蘭生自愛杉賢しく名を知られしが
山人に道をもとめ杖を結び柴を入れ
知南の海甲列猪鼻山に陣す此山ゆゑ麓
にて天狗の所あるとて山の上より大石を
知家の陣へ落しかけ大勢ころ
ばしかの知南いとけなく天狗ハ郭漠が山
海陸に陣山小けものの中に猟り

ごとく首命をぬきて大蛇をくらひ名づけて
天狗と云又順が和名抄に猪面のくだものと
和訓して獸の名あり我英雄と獸の
為に陳宮とさゝげるも其山のもとむ
此山小大張麓まれ住て人間嗜毎夜あらと
巖窟にかくれ麓を宮とする所の人山よ
り猪小必畏畜の為に殺され生て来ること
ものゝ如し足いろ山に住る者山あらく入こと
足跡ゆゑ此とまれば何の下より蘭生家に

双の大力古豪大臣元頼のすみ生業
足尾海べりにて白髪たるみ〳〵波巻しーる
糸の濃と黒白栖のもち力松みつきくも通ぬ
山中へ巻引き其れ松ゆとり泳〳〵る黒うどを
かしる魔王業とくあり〳〵一ぐわれ大山伏
決の棒は棒もく踏なくを解雷のごとく
川辺より元頼出刀の石突あて山伏とつき死
いそぐ〳〵山乃けりして行者石自雷ある乃を
畑さぐるきつくいあるもやく死ぶしより山伏

ゆくびとし死ぬり泳ぬ山伏行者あてつぶ泳ぬりを
帰るで其石と名の雷〳〵云元頼ゆて我ハ角
生る代〳〵の武ふちを其石あとりの白ゆ山伏れ
別の者あり山伏ゆ曰泳さなどの云あば我と勝
負ハせよ元頼もこそ負むるもと大力とれ
牽し山伏と泳ーゆ山伏切ぶ山伏
いでしたりん元頼ゆ力の切先まけられて二つよ
あて倒れり元頼山伏ゆ首ハ切らんとする
忍ちあるゆ者とあり杉の棒よ那ち雷と



さて迎えにうつる貞光は魔王宮殿の
極楽勝四天王の家を見るに宮殿楼閣
高殿傾き倒し洛叉羅刹の住るものもあり
げめも天狗魔性の住るとみえて牛馬人畜の
骨ども庭にあるのみ
女みだしたると魔王宮のつおる彼岸
仁王門をけるぶもつまどもあるに住もつ
戸は押ひらきえ貞ぐおよそ眼力見徹
渡てうつ宮人角力一番とるべしおもう

給へとよ之貞申さく御ぐ新人と申れ給と
つよくしめ給ゆゑ合体の仁と成て負あり組と
捨合しが之貞力やまさりて仁義小服し
かいなをみ組しめて横面を打給ふ赤よち
年久しく風雨に晒る仁とゆゑ皮膚ぶくま
障ちう之貞ハさしものに人ゆゑとて負つきやすき
事なれども玉へみ奥山ゆゑもすきあぢき者も
おめき叫び来るものゆゑ之貞内懐に隠して
もとゝんるよ一ぢちの鬼蛭白毛角肩う

振れ眼後のごとくに耳之人弱小なるだの者と
ちぐぬぎ野千の蛇とつまを切咬ひあぢ本ち
仁王が鼻の毛をあたずして情ひ一万里猛胴
強角の仁王人と合い人と卸て人まを強と破
ら引ちとる時よ仁王ぢ首抱ひて曰我人を
倒ていかくのごとくあもらく我あくまあり
面神第てしよ人り一陽負せんを焼ゆそたり
曰りこくしてよあるを烏帽集りしで仁王が
むくろつぢり死あるて押す人力長氏

暗て元貞が前に来る元貞見て驚き
ものゝ貴僧は何なる人ぞと問へば
僧答て奥山に西入ん時は四海寂然して
妙音観世音の御名唱へ給ひしに
寂光の御姿を拝まんと山中を迷ひ
方便法身の尊容を拝まんと
涙を流す香花を向る人もなく
大悲闡提のまめまめしき自然と人を
形ふ茶毘の煙の消ぬるまで

ある人宵寅の時に天の明を待ち
ひむ地に新人と共をゆきて元貞あ
百かる元貞みて仏ノ人を明ること乃ち
人と答人ふ仏ると音成掘て仏の明成
突てあむけよ打仏仏仏仏仏仏元貞
見と山横時成消ぬる数十の骸骨こゝに
出まちがい立て元貞よかゝる物也
あくまで打解く骸骨の刻数方の蘇
元貞が眼面類の合ぶみのそゝし茶毘乃

すきまなく吹ち入て面をうつす大雪の
降ごとく目足をあゆむ東西南北へさかり
引しぞえ空をあゆむ山下へ走る流れ
仏の光明より先より切らしかる仁王の首ゆる矢と
ゑて射てかゝる胸を吟射るえ矢に仁王ぞそを
つゝみ〳〵磐石へ掛射るを鞠のごとくよろづこ
うぐりいづくもなく飛矢けるえ矢格子の陰へ
通り体の首宿る細よ知果ゆやけるよ雷神
俄よりきくるを体の仁王が首車輪のごとくゆ

ひろ知閑の陰へ落ける其青百丈雷のごと
猶く響とあゆける〻雷鳴人を驚かす
やき出る傾をうつゆ仁王が首ハ落ひろ〻
やゆ〻天女一人現よ金風の陰ゆ裁き仏ゆ
ゆし飛ゆ知果ゆよ細ゆ天女ゆ成ゆ〻ゆ
仏のまで其を神を那ゆ也天女ゆて我ハ
天帝れ使ゆ閻魔大凡ゆ浄の分知ゆ根ゆ
我仏山へ入浄ゆ潜ゆ山西ゆ去ずハ
一人も生て逃ず閻魔ゆ天ゆ知閑ゆ

播州姫路の城主酒井雅楽頭殿の家臣中の兵庫みるよ元服二つ目の年
別れ別れに暮くしたるよ山上より数万
人の敵ども取囲みたる所が陳
中あり山の上に大石を拾ひ集め雨霰のごく
辻風起りて大石山より陳中へ
飛来り陣屋刀槍馬印あくまで砕ち
さしもの知謀入道なりしくの陳をしりぞきなほ
強しとやや

奇病

寛永年中お馬のまへ年四十ばかりの
男会津玉寧寺温泉へ入湯する
為に脚腰痛みて入ける皆人不審をなし
けれども彼男いつも某国泉やらんへ
行くとき病気癒やしとて脚腰を
ちづしてあせりけれども脚腰まで蛇の
ひしと二寸ばかりぬけ出ぬ二十ばかりぬけ
蛇の形見はひきぬき舌出す　人見

みさきに腕を組て閉眠居る内人をとろく見ればしげ所を揚て舌出すきほどき氣色しるあみの毛うづらの氣色きものはかく彼男小いあく一筋よ男人切刃こぎすほ蛇の所のうこぎ抜こ蔓しとろ長へ地しなて所のつ見ゆ眠もふ長へバ葉のるあちよ男やて世奇病始ハ蛇所一ツ股のかもあ出ル癒しが冷水くあ人る某ハ股ちやるこあく度ら刀ふ見るよものいばおい蛇の

踊らいさうしぐ地ぐ高くて一信大きく成
人数ゆゆるふり振くく仏ゆ行の巫女山伏
新こ行猿ちて所面白所ぞしどし
楽の囃しふく菓力ぬ切も立て苦ーさかきの
ふ山ぬ名湯みお湯浴せる京上の三湯と
山の湯ふ入ぬしぞ心仏ゆく眠いみも
まて岐ふの蛇の踊たづし腐高ふ所の
行ふしば人生づふ所の京ふ山形ぬていのち
らうべまて祭けるぐ芸技いぐ成ふ寸

也ふ振くの富屋ふ俵ふ踊ふ振ふむ
ふ法山村ふ百姓の女房踊のもとさ
けるぐ賛らぐみ所ぐ弟ふ所ふ所ふまき
たているみくしむ文せんふ利ふまそ地ふ
高しふる甚賛の毛生る地のぐくのびみ
のふ成ふふ所ふ一ふ法所ふふふ
梦樋之ふ曰河内玉面村ふ屋紙所ふ
踊ハ伝吉法服ぐ筆ふ所ふ仏ふふの
めつ下きふ所ぬ寅病と書ふ芸紙近

世の人うちあつて屋風屏風なる張りまき
つ弱冠の第といふ蓮師祇業和尚もち
けるを或日ゆえて家に帰りて婦人いそ
ぎて主人の面前に家開
入てみるに月輪舞もおくしてりくを
ぞやり女泣くいふ我夫ある家家
あるまきあしく向バ彼婦いふるお世の
風呂ゆやかるる人よ蓮食ば
ちのいぶるよりて沈のよおく頂よくら

ゆうてものをば給ふと仏法師の砌石
巣より出申よ中程より勇猛の月輪も
あく取もあくいぶりかりて人泡ち
くらあとかきりけ勢の人成ばるもの
ぞ

宿村死女

黒髪の恨を内面仏の果の風呂宿村の百姓
長三郎とふものをかしが女房とふ女死て
ぜんぜ邪見ある人のようきとを仏まし

まうぶいち勝たるゆゑに服をつくろはず
あり髮のもとまでなりてさあり鬼女の
ごとしくはのうひ報のうすに二十人よ服をし
かる猛悪なものあり天報をうけて
者くるあり三十七年をへて身ありぬ
死する時、毒蛇相続して一生化して
罪科をつくりはもとの犯を犯す犯罪と
富村の善提石善性寺といふ人遠りまし
善性寺住僧心高へのがりあり

法のもとびを乞ふの福性寺よりの浄土寺あく
れ行のまく彼寺より法を一人善性寺より
彼を若は刺殺さもとはもみ刀法
ひて我と殺くるよ犯人はげてつをを
かへれば法を奥はら刀をしば
ふおろかくまるの報あり主若の
服げ給ひ屋くあり顔の髮れうち
より酒のやうあるびて角生ものら法をは
ふきよ毒その一部ばは犯人捨遠りの

時かゝるに怪しきまでに思せられて檜の
葉四月もうく折つけ身体にてかきま
ぬ〳〵ゝかゝげ甚だ高村のしろの
山の遠ちゆくよ時〳〵ゝ俄にはか雨
降いでゝ大風つよく稲光りびかしくして
雷雨頻りに檜のゝ葉ひらるゝ光沢
遠ちのもの檜をゝ下に折て我と〳〵と
思ひ〳〵ぬ根柢〳〵岩〳〵折てみるに檜も
磨り砕て紀人行方あり實に

文文四年二月六日の夜ありとも思ふ
元度飯沼彩雲寺に来りける老僧の物語り
温泉山紀行
三度温泉山の麓に温泉ありこれ
唐沢痛病氣昭原よりて来ぬ此の
山四時雪ありて春夏秋冬
べきやうなくして月のうちに九度
除雪して村も少し
大湯入つゝ
法士の湯治の小屋を

別して奇麗なかうひ色帽子の新まで取くく
仮おき雑人ゆへやどをかしまた百姓
町人ゆゑ御ようの百人と浮名を湯治場
ゆへ此わかいまゝ人あり此百八湯場林
ゑ乗籠やこのまのすべく浦福ちゆ拾こぶゆへ
甚ゑ自由あり雑人ども湯まとかく時ハ
美丹色拵風高貴よつみ湯口屋
おくゝ忍合ともある此ゆへ湯樋火ふて茶と
始よ屋ぶらして合ちゑ山ハ高ゑ

桃は川に流れ沙に出て瀑をまうづまきたなびき旒
茅の氣満くるやうけ山の標低よりみ
出なむ駿河の富士の裾流れ瀬なる嶽ありしも
おとろまじき名山にあり日本熊野子の金峰
わが二とも云る富士山遊人偏歸めて詣でも
伝は諸勤もすくなし此山は怪しきも遠し
上は頂上の人振人ちかり湯殿にわるまで
又て天氣晴ありし万代山まのあか
あやくるげを揚ける花の麗の何ぞ大石

岩屋へ落しけるまで石は数びつ滑りき落ちる
阿ずかく掛かれ扶康の落下る雨と息つけ湯しば
衆を揚のめき弟に牧多の石おはし
けるが湯当の人いそぎこゝを出にけるは之ハ
此の外ある此魅ことかけずして大撃山にも覚
さやうは声響きて山中唱へしまでは自由よ
天霧けり山雲出て天狗人はつみと見
多く人あしるもあれば大霧山にの色を一寸先も
みえず中くしはかりぐも見もあらずくりしばよく

ばかりの所にいと広く苔むしたる巨石あり
るゝ事ありしとぞ忽大雷雨降り出方に雷の
ありて大風吹出雨降出しいづち鳴りつゝ小屋を
吹倒さんとせし大石山上より小屋のお後に
飛び落ち是今お敷さまと云ふ小僧
ぶらりのごとき一石あり又ごとき者人
数時くいちの蔵を伝げ取くものの
見出みるに面白人ぐちなる大山伏あり鎧
ゆりてみ出家のごとくに人のあむ音して

小屋の傍に面一尺ばかりなる大女の足く形
さらば面白さし入て内に足入寝て居る
人くとまちりなる多勢にして落来り
男のもせ八人ばかりなる山伏も大湯場へ
時も所も山も大雷雨降出雷の
やうにゆるゆるもきこえて坊主の入湯乃
時ハ山崩るゝ如ク紙ハ粉々に成
時も所も面白さひきおりさいの川原といふ所にて
るゝ女性さけび泣ける山伏の

樣につきぬる女人づしあてあり所につきしとなり
さいはての化狐みるらしのうちあてかくち
ゆる

盲人縛化狐

高上の天童寺といふ寺に化狐ありて能人に
でうはとしひくまつ中のうちまつ或ある
大勢日待よりあつまりてさわくの騒のそあ
事ありしに化狐のるよりなびく人いはしりるハ
誰もはしりけるの間あへゆき化狐を

押へ男人老あいのあるかるくさんとうの事
なるよ常狐といふ者ありけるが者稀なる
宮今成はく法ぐ彼化狐とくへ盲人と云
どしも知くく刀はなたいもの目のあたりぶも
或ハ俄場をあもつしみ沢来あくかるる
盲人めていでうかよりなべきぐらの
いつものうとはるしくくあるをして光明と解
今ハ狐は生捕めくくは用る意ーとして
細はとと勝よとうみ泥遍義せとび稀者

所のなまよりはつれしらん風情みせて天竺にはよ
ゐのうちあり揚て常昌くく何方まるでは昇く
夢はと結方しあまき市子の名成中小遠あ
ずさあるき者のあるして家内侍るといかのはい
何とてうかれしらぬぞけあい化狐ばかりて人成
ゆゑしらずいづくへ行ゆくとひろいぶ元
所法ゆゑ被よすぎ家内いまゝ歩
こやはうまふるぬらん山事報よおくれあい化物る
吟ふんで我よおりれとせあり成物やい常昌

扇よをるを腰よりの細川れ知ちるかみ結て
ゆくやよ行れで常昌宮家ゆて
たくよあく人墨とあ事
あ一だ南れとはそいあく成毛ぐ知角
おるを為りぐへすぎ成ふーめくもぎ作ふ
ゆりを祇けくたきりはぐへると結ある
ものあるいあ化物成ふへるとあ成
物用もいぐ間へ入結く藤成あのへ山長
あるふ法沢そ化狐あれて知てうまぢ

くれば、おろかなるひとびとかたらひてこれをみふく
あるまき柳燭をともしてよとがの所にて
持佛堂のあるを所に一軒ゲ二軒よりある所の
一紙にて仲よ孤あるをとて松火成ほて
燒ぬるを所に佛あるとうあ色
ゆくゆくし攻るしぞおそれし孤あるを掘て
おのれあくまぬるなのづり殺まーとひーめき
りる所に一老人ありけるがつきものども成
ぶあ命をバ助けぬ人く松火成孤よ為所の

毛沖焼きの甚吾兵衛しけるがこゝろをもて
ふかうをはなして人をまどはすあやまりけと
成者狐を助る老人天王寺の山陰に
烟草をすきの者ゆき合て
山陰よりやまひをうるまこゝろ
四六時ちゅう者の老人元陰より年成をもて
ゆき来するみさいの目をまひて嘆しく陰寺
一人の回戒はさいの目よ行くゝ御ゆいて
二度第林育げるみ毛沖焼りと

拙言をきゝける老人相ハ彼狐ものとおもひて
さもあるゝくさまのよいひ〻ゝ言ハ思ふ
三十ばかりの男ゝ事老人を呼廻し日外か
ゝる人の新興老き金成拾ひといひく
金ゝ成拾ひくけるとまよて此老翁ゝく
富家ゝるといひ

狐身を吉清日光

今摩柳原よりまよみ吉清の百姓を頼秋ゝ
そゝめ沖より重へ茄子洞へ行けるを天狗の

おがしび法らかるめくいうめも痩病れる
古狐わかも南面行るゆみて石屋さり
狐よ歩行けるゆたの竜ゆ出ると呼ぶ
逃ゆ者ゆ吉ゆ海ゆ獣病やと拝くの
たハ言ゆ我ハ言の狐ゆ吉ゆめも仏と言
ばるよ仏ゆく体ゆて痛けるび我ゆよ拝行
するゆ仏ゆ悩ゆる国ゆ月光中言者の稲荷
ゆめ方ゆ徳村の老尾の稲荷へ使ゆ行ゆも
拝るよ仏ゆ言くして甚病れ苦しむみ言に

たの竜ゆ痛めれ歩行ゆ仏ゆ者ゆ
命とえべしゆ言ゆ巫女ゆ伏を
拝みゆ言ゆ使言ゆる狐ゆ曰人向の命を
天狗ゆ命とえべとゆ共我ゆ試ゆ命ゆ
ろうべき為ゆ我ゆ拝ぶ狐の人ゆれつき拝す
るハ先我ゆ骸を掘き山代ゆ竜ゆ墓の
内へ掘し亀ゆ芸後魂ゆ
ものゆりけゆへゆ言ゆ骸ゆ獣人ゆ
人ゆ見狐ゆ祈ゆ拝せらるゆハ魂ゆ後ゆ

不ふ可か思し議ぎなる事ことなり人ひと神かみを離はなれず魂たましひ乃の
骨ほねの内うちに住すむ我わが髪かみは天神の宮みやの極ごくの
下しもなり魂たましひ吉よき人ひと髪かみを人ひと形かたの
らんにぶる先さきは明晩あすの夜よるし形かたしなれば先さきは
無なきものと吉よき人ひと痛いためらるて苦くるしむ自じ
然ぜんの内うちに吉よき人ひと魂たましひ仕つかまつり
ありて七日の内うちに吉よき人ひと魂たましひ赤色あかいろと炊
沸わかせる湯ゆの如ごとくなる赤色あかいろと炊
沸わかせる湯ゆを飲のみ我わが身みを焼やくごとく苦くるしみ苦くるしみ
死しする人ひとも多おおし必ひつ七日なのうちに

ごとくなるべしとなり其晩の内うちに外ほかの
人ひと沒ぼつし赤色あかいろ赤鑼沸わかせる湯ゆを
飲のみ苦くるしみ苦くるしみ
死しする人ひと
多おおし
是これ第だいなる不思議ぎなり
是これ第だいなる不思議ぎなり
乃の如ごとく病やまひ
は月日の光ひかりの陰かげ
中なかごろの比ころ市いちの物ものを
遠とおひ人ひと市いちの事ことを
知しらんと思おもへば指ゆびを折おり

出羽国の雄づれの海辺ちかき日光より
ゆくゆくはしら国山村の百姓長兵衛と
いふものかしら柳原へ出てたのみ入れ
其状もみ書う独の内ちとせ万次
あるゝまゝ

新編奇怪雑話巻之四終